

平成 2 6 年 6 月 2 7 日現在

機関番号 : 3 2 6 4 7

研究種目 : 若手研究(B)

研究期間 : 2012 ~ 2013

課題番号 : 2 4 7 2 0 1 2 3

研究課題名 ( 和文 ) &lt; 9 ・ 1 1 &gt; 以降の米現代小説におけるニューヨークの都市空間表象の諸相

研究課題名 ( 英文 ) Representations of New York Urban Spaces in American Literature after the 9/11 Attacks

研究代表者

並木 有希 ( NAMIKI, YUKI )

東京家政大学・人文学部・講師

研究者番号 : 9 0 6 2 6 1 9 4

交付決定額 ( 研究期間全体 ) : ( 直接経費 ) 2,000,000 円、( 間接経費 ) 600,000 円

研究成果の概要 ( 和文 ) : 現代米都市文学・文化作品および研究理論の基礎調査を行い、< 9 ・ 1 1 > 事件の記憶の表象と事件後の都市空間表象について、近代文化との断絶と連続に注目して、その特徴を整理した。その上で、事件の経験が近代米小説の中で成立した摩天楼を中心とした都市空間の表象に与えた再解釈を研究した。さらに、調査の過程で明らかになった「精神的外傷と都市空間の表象」という主題について、家族関係との関連で都市空間の外傷を把握する小説群について研究した。また、日本人作家による米国を題材とした作品と、東日本大震災についての作品を考察に含める事で「災害の記憶と空間表象」についての比較文学的知見を得て、国際共同研究を開始した。

研究成果の概要 ( 英文 ) : First, I compiled a bibliography of primary and secondary sources on contemporary American literature and culture with a focus on its representation of the 9/11 terrorist attacks and their aftermath, and cultural theories on the urban space and its representation. I examined this in relation to my previous studies of modern New York and the use of skyscrapers clarifying disjunction as well as continuation in the tradition. Then, I examined individual works to find out how artists revisited the modern narrative of the city after the experience of destruction. In addition, I studied a group of novels that use mother-son relationships as symbols of resiliency in contextualizing traumatic experiences. To examine the topic in a broader context, I discussed Japanese artists' representation of New York/USA as well as Japanese works on past disasters and their traumas to initiate an internationally collaborative research project on disaster and its representations.

研究分野 : 人文類

科研費の分科・細目 : 文学 英米・英語圏文学

キーワード : アメリカ文学 アメリカ現代小説 地域文化研究 都市と文化 災害と文化 国際情報交換 ( アメリカ )

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、「アメリカ都市文学」すなわち19世紀後半から20世紀初頭のアメリカ合衆国において発展した近代都市と、そこにおける個人の経験を主題としたリアリズム文学の形成と発展の歴史を研究テーマとしてきた。特に、都市が未曾有の変化を遂げた1865年から1945年頃のニューヨークに注目し、急激に変化する都市の建築、特に摩天楼群が作り出した特異な都市空間がどのように知覚され、表象されてきたかを、小説を中心に他メディアの都市表象と関連付けながら考察してきた。

(2) 「都市文学」は近・現代アメリカ文学に中心的なジャンルであり、先行研究も多くあるが、形式(リアリズム・自然主義等)または主題(移民文学等)の下位分類として扱われることが多い。このジャンルを再検討し、都市空間の変化とその表象の移り変わりの変化に焦点を当てることにより、形式・主題・メディアを横断した文化研究の可能性を模索する必要があった。物理的な環境構成と社会的環境の相関関係についてはローレンス・レッシングのアーキテクチャー論などに端を発して現代の人文科学研究において重要な課題であるが、文学研究に応用した例はほとんどない。極めて人工的な都市が複雑に発達した近現代ニューヨークの文化の諸相を総合的に捉えるためにはこのアプローチが最も有効であると考えた。

(3) (2)の仮説に基づき、近・現代アメリカの代表的な都市文学におけるニューヨークの都市空間表象を再評価し、それぞれの作家の描いたニューヨークの都市空間の固有性と共通性の変遷を明らかにした。またフォト・ジャーナリズム、アニメーション、新聞漫画など同時代の異なるメディア作品を検討して小説内の都市表象と対比することで、広く文化の対話関係を検討する方法論を模索した。

(4) これらの各論研究を通し、近代ニューヨークにおける特異な都市空間の成立に沿って生まれた固有の美学と文学形式の発展について、摩天楼とそれにまつわる空間表象の変遷をテーマとすることで、ひとつの一貫した見方を提示できるという見通しを得た。そして、近代ニューヨークに特徴的な3つの時期(1900年代、1920年代、1940年代)において、摩天楼を重要な文学的モチーフとして利用した3人の作家(ドライサー、フィッツジェラルド、ランド)を中心に、同時代の都市空間表象を整理し、アメリカ都市文学の形成と発展の理解には、近代ニューヨークの特徴である、極めて特殊で人工的な都市空間の影響を考察に含めることが、主題・形式両面の理解において不可欠であることを明らかにした。

(5) また、(4)の研究の傍証として、現代アメリカ文学における20世紀転換期の都市空間の再読をした過程で、現代、特に<9・11>アメリカ同時多発テロ事件におけるワールド・トレード・センター崩壊以降のニューヨークを扱った文化表象の研究においては、今までの近代ニューヨークの建築と都市表象の関係についての研究で得た、摩天楼を中心とした都市イメージに関する知見が極めて有効であることが明らかになった。

## 2. 研究の目的

(1) 現代アメリカ文学におけるニューヨークの都市空間表象を、都市空間の物理的な変化、特に都市の歴史ではじめての大規模破壊の経験である<9・11>事件との関係において調査し、現代アメリカ都市文学における空間表象研究の緒をつける。

(2) その際に、今まで行ってきた近代ニューヨーク小説の研究で得た摩天楼を巡る言説の形勢についての知見を踏まえ、近代との「接続と断絶」をテーマとして、他メディアにおける都市空間表象との関連についても広く調査し、その諸相と特徴を明らかにして21世紀アメリカ都市小説の理解に先鞭をつける新しい視点を提示する。

## 3. 研究の方法

現代アメリカ都市文学における都市表象研究を効率的に進め、体系的に整理するために、2つの調査主題を設定する。

(1) 「<9・11>事件の表象：空間と記憶の問題」。<9・11>すなわちアメリカ同時多発テロ事件によるワールド・トレード・センター崩壊から10年を経て、事件を主題として、都市空間の破壊に重ね、集団と個人の喪失の経験を物語る作品が多く発表された「近代に大規模な破壊の経験を持たない」というニューヨークの特異性に注目し、都市の初めての物理的破壊の経験が、自己表象に与えた影響を中心に、これらの作品を調査検討する。

(2) 「<9・11>以降の都市：近代都市空間の読み直し」。ワールド・トレード・センターの破壊は、実際の建築物が資本主義社会の概念的象徴としてテロの標的になったという点で、それ自体が近代ニューヨークの都市表象で形成された摩天楼に関するロマンティックな言説の文脈に属するものであったと言える。<9・11>以降、この矛盾を踏まえ、近代から連続するニューヨークの自己イメージを問い直し、摩天楼に新たな意味を与えて近代の都市空間表象を再読する試みが見られる。この新しい動きについて、

ニューヨークを扱った現代アメリカ小説を中心に調査検討する。

#### 4. 研究成果

(1) 設定した2つの調査主題群に沿って、広く基礎調査を行った。現代アメリカ都市文学・文化関連の一次資料・二次資料、またポスト・コロニアル理論を中心とした都市空間の表象に関する理論を構築するための文献をまとめ、書誌を製作した。これらの文献の精査により、現代アメリカ文学における〈9・11〉事件表象の諸相と、事件後のニューヨークの都市小説における都市空間表象の状況を把握し、特徴を整理したところ、2つの主題が見られた。すなわち、近代アメリカのニューヨークを巡る言説の中で形成された、摩天楼を象徴的な存在と捉える物語の読み直し(近代との連続) 初めての都市の破壊の経験が都市と社会共同体に与えた物理的・心理的外傷に対する反応として、破壊の経験を中心とした都市・社会の捉え直し(近代との断絶)。これらの2つのテーマを中心に以降の研究を進めると効果的であるという見通しを得た。

(2) 基礎文献調査の中で得た のテーマに沿って、〈9・11〉の経験が、近代アメリカ文化・文学の中で成立した都市空間表象にどのような再解釈を生んでいるのかを、特に20世紀転換期の都市表象と比較する事で検討した。具体的には、アート・スピーゲルマンのグラフィック・ノベル *In the Shadow of No Towers*(2004)において、19世紀末の新聞漫画における都市表象が再読され、全く新しい意味を与えられていること、また、都市の破壊の経験を受けて、近代ニューヨークのシンボリック存在であった「塔の不在」を不在のままとして象徴的に扱う試みがなされていることが明らかになった。研究成果はアジア比較文化学会で発表し、論文にまとめた。

(3) のテーマに沿って検討を進め、〈9・11〉の前後から一貫して人間の意識と物理的環境に注目した作品を作っている映画監督チャーリー・カウフマンの映画作品を取り上げ、ニューヨークを扱った連作 *Being John Malkovich*(1999) および *Synecdoche, NY*(2008)を取り上げ、摩天楼の表象と個人の社会的地位の変化という近代ニューヨーク文化に特徴的なナラティブを、都市と個人の経験が器質的に一致させることによって異化する効果について検討し、論文を執筆した。

さらに、コラム・マッキャンの小説 *Let the Great World Spin*(2009)における塔の表象に注目し、塔の不在をニューヨークの都市空間形成の歴史の自然な発展形と位置づける、新しいナラティブの端緒として評価する論文を執筆した。

(4) 調査の中で明らかになった「精神的

傷と都市空間の表象」(テーマ )に沿って、災害からの社会の回復を、家族関係、特に母と自閉症の息子の関係のアナロジーで描く小説群の存在に着目し、ヘレン・デウィットの *The Last Samurai*(2000)と、それに影響を受けたジョナサン・サフラン・フォアの *Extremely Loud and Incredibly Close*(2005)における母子関係と子供の存在の特権化、つまり、父親的なものを中心に据えずに成立する空間としての都市空間表象について、の序論を発表した。

(5) これらの研究の中で、「災害とトラウマに対する文化の反応」という拡大したコンテキストにおいて〈9・11〉の経験の諸相を検討することで、ニューヨークという都市の特異性について理解がさらに深まると考えた。そのため、アメリカ、特に第二次世界大戦の経験を扱った日本の文化表象との比較文化的なアプローチを検討した。その視点で、会田誠「紐育空爆之図」(1996)を取り上げ、集合的な記憶のトラウマとその芸術表象についての考察を発表し、アメリカ文化研究学会全国大会において発表し、論文にまとめた。また、同じく会田誠の連作 *Monument for Nothing* のうち、東日本大震災と原発事故をテーマにした *Monument for Nothing iv*(2011)を中心に、「災害・戦争と記念碑」にまつわる作品群の研究から発展して、震災後の日本文化と「記念」の試みについて〈9・11〉以降のアメリカ文学に見られる試みと比較した。成果はアメリカ比較文学学会全国大会で発表し、論文にまとめた。

(6) 研究の過程で、英米文学および比較文学や災害研究分野の研究者と意見交換の機会を得た。特に、ニューヨーク都市文学研究の世界的な中心である、ニューヨーク市立大学大学院英文科学科およびアメリカン・スタディーズ学科に協力を仰ぎ、マーク・ドラム准教授、およびモリス・ディックスタイン教授、ジョナサン・グレイ准教授と意見交換し、書誌の拡大と、近現代アメリカ文学におけるニューヨークの表象についての研究協力関係を取った。さらに、「災害の記憶と空間表象」について合衆国デラウェア大学災害研究所トリシア・ワクテンドルフ准教授と意見交換し、国際連携の機会と共同研究の緒を得た。

(7) 岩手大学・福島大学との連携において東京家政大学大学院人間文化研究所が主催した東日本大震災関連のシンポジウムに参加し、「災害における記憶とその表象」についてというテーマでニューヨークの事例を紹介した。また、「災害と文学」のテーマで一般向けレクチャーの機会を持った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

NAMIKI, Yuki, “Is the Knowing Child the New American Adam?: The Figure of the American Family in *The Last Samurai* and *Extremely Loud and Incredibly Close*”, れにくさ(東京大学文学部現代文芸論研究室論集) 査読有、5 巻、2014、326-334.

NAMIKI, Yuki, “When a Reader Encounters Another Reader: Comperative Study of Interpretations of *Moby-Dick; or, the Whale*”, 英語英文学研究(東京家政大学人文学部英語英文学会) 査読有、19 巻、2013、7-27.

NAMIKI, Yuki, “Representation of Post-traumatic Urban Space in *Synecdoche, New York*.” IRICE PLAZA、IRICE 英語教育学会、査読有、23 巻、2013、61-68.

NAMIKI, Yuki, “Bridge between Elsewheres: Representation of the Post-traumatic Towers in *Let the Great World Spin*.” 英語英文学研究(東京家政大学人文学部英語英文学会) 査読有、19 巻、18 巻、2012、45-59.

〔学会発表〕(計 4 件)

NAMIKI, Yuki, “Life after the Meltdown: Traumatic Spaces in Contemporary Japan.”、Capitals: American Comparative Literature Association Annual Conference、22-24 March 2014、New York University, NY, USA.

NAMIKI, Yuki, “Beyond the Vanished Towers: Representation of Space in Post-9/11 Graphic Novels.” The Asian Conference on Cultural Studies、24-26 May 2013、Ramada Osaka.

NAMIKI, Yuki, “How to Remember a Catastrophe: Traumatic Spaces in Aida Makoto’s *Monument for Nothing*.” The Popular Culture Association/American Culture Association Annual Conference、27-30 March, 2013、Marriott Waldman Hotel, Washington DC, USA.

並木有希、「9 / 1 1 事件とニューヨーク小説」、IRICE 英語教育学会大会、2012 年 9 月 22 日、筑波大学茗荷谷キャンパ

ス

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

並木 有希 ( NAMIKI, Yuki )

東京家政大学人文学部・講師

研究者番号：24720123

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし